様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月２４日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2011
課題番号：20520617
研究課題名（和文）　アッバース朝書記史料による書記官僚社会と文書行政の総合的研究

研究課題名（英文）　Total Studies on the Abbasid Administration and the Writings of Bureaucrats in the later Abbasid period.

研究代表者
清水　和裕（SHIMIZU KAZUHIRO）
九州大学・人文科学研究院・准教授
研究者番号：70274404

研究成果の概要（和文）：
本研究は、アッバース朝・ブワイフ朝の書記官僚が執筆した文書集その他の人文学的な著作を中心に、アッバース朝の文書行政と官僚社会のあり方を検討し、当時の書記官僚の形成した相互規定的文化や行政技術、規範意識などを明らかにすることを目的とした。その成果として、アッバース朝における文書行政のマムルーク朝における伝承と変容、異教徒官僚の周囲に形成された文化や改宗者・奴隷との関わり、紙の伝播と行政利用の在り方などが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this research was to examine the art of administrative documents in the Abbasid period, and to investigate the culture and codes of behavior among the governmental bureaucrats, mainly through their literary works and documents which are extant as collected works. In the course of this study, I discussed some aspects of cultural and social changes in the Abbasid society, such as use of paper and the glowing political role of slaves, and its effect to the activities of bureaucrats.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：西アジア・イスラーム史

１．研究開始当初の背景
　研究代表者は、アッバース朝における文書行政について、アブー・イスハーク・イブラーヒーム文書集を通した研究を行い、また書記官僚が徴税業務において、独特の内部論理を用いてその業務を遂行していたことに着目し、これを The Craft of Knowledge の概念によって検討していた。本研究は、その成果を踏まえつつ、さらにその視点を、書記官僚を取り巻く知的・社会的環境にまで広げ用途試みたものである。

２．研究の目的
　本研究は、アッバース朝の書記官僚社会と文書行政について、両者の関連性に着目しながら、その全体像を明らかにしようとした。その目的として

（１）この時期の代表的な書記であるアブー・イスハーク・サービーが残した文書群のあり方を継続的に明らかにするとともに、同時代の書記官僚達が残した、他の文書群や文学、歴史学、倫理学など多岐にわたる著作を分析することによって、これらが生み出された社会背景を明らかにする。

（２）これによってアッバース朝の書記官僚社会と文書行政の関係性を分析し、当時の書記官僚が形成した相互規定的な文化や行政技術、規範意識などを明らかにし、ひいてはアッバース朝社会のあり方を解明する。
　以上の２点を掲げた。

３．研究の方法
（１）アブー・イスハーク・イブラーヒーム文書集の各種写本群を継続的に比較検討し、その内容の分析を進めるとともに、イブン・アルアミードおよびサーヒブ・イブン・アッバードの文書集の内容および様式の検討に着手し、各文書集の内容の比較および体系的把握を行った。

（２）アッバース朝後期の代表的な書記典範であるクダーマ・ブン・ジャーファル『書記の流儀』、アブー・バクル・スーリーの『書記の教養』、およびアッバース朝行政に大きな影響を受けたマムルーク朝の書記典範であるイブン・ファドルッラー・ウマリー『高貴なる用語』の読解分析を進め、アブー・イスハーク・イブラーヒーム文書群の理解の深化に努めるとともに、特に、アッバース朝期とマムルーク朝期のアフド文書の定義、様式の差異について検討をした。マムルーク朝との比較については、谷口淳一、近藤真美、伊藤隆郎といったアイユーブ朝、マムルーク朝研究者との研究連携を行い、その理解を進めた。

（３）書記官僚の中心をなす異教徒および異教徒からの改宗者の社会的な在り方を検討するため、それら改宗者の社会同化への過程や、改宗者・奴隷が宮廷と行政機構および軍事に関与していく歴史的状況などを、書記や改宗者の執筆した文学から検討した。

（４）同様に、これらの改宗者が中央アジアから導入した紙に注目することにより、紙の行政使用やアッバース朝人文学に与えた影響を検討し、さらにワッラークと呼ばれる紙商人・書籍業者と書記・文人の関係を、西アジア古来のヘレニズム系学問の継承・伝播や行政機構・行政用語への影響などを念頭に検討した。

（５）初期イスラーム史における書記の様態を検討する必要から、「初期イスラーム史研究会」を定期的に開催し、若手研究者との意見交換や研究の推進を行い、本課題に関わる重要な研究の場とし、またその場において本研究課題の成果の発表も行った。

４．研究成果
　本研究の主な成果は以下の通りである。
（１）アブー・イスハーク・イブラーヒーム、イブン・アルアミードおよびサーヒブ・イブン・アッバードの各文書集の様式について、校訂本および写本マイクロフィルムからの情報を精査し、総合的に検討を行った。
　特に「授与文書」に類型化されるアフド文書、タクリード文書に注目し、これをイブン・ファドルッラー・ウマリーやカルカシャンディーまたイブン・ナーズィル・ジャイシュの書記典範に記述されるマムルーク朝期の授与文書様式と比較して検討したところ、アッバース朝期の授与文書が、マムルーク朝期においてもその典型として尊重されつつ、大きな変容を被って継承されていることが明らかとなった。カルカシャンディーは、授与文書の授与文言についてその変化を記述しているが、これはアッバース朝期以前からのマムルーク朝にかけての「授与文書」の様式的変化の実態に呼応している。その中でもアブー・イスハークやサーヒブ・イブン・アッバードの用いた形式はその一典型をなしていることが実証された。
　特にアッバース朝後半期においてアブー・イスハーク・イブラーヒームとその周辺が用いた amara-hu で始まる、「授与文書」中の命令文（権力者が配下に権限の授与と同時に遂行する職務内容を命じるもの）については、その内容からアッバース朝期の特定の職務に付随する「行為」と「理念」を明らか

にすることが可能であり、その職務がいかなる職務内容を包括し、またその遂行を期待されているか、さらにその担当者に必要とされている能力、倫理、規範意識はどのようなものであるかを明らかにすることが可能である。

この命令文については、マムルーク朝期においてもイブン・ファドルッラー・ウマリーが詳述しているが、その形式、内容ともに時代による変化を受けており、特にアッバース朝後期の地方総督に対する命令文は、マムルーク朝のものと異なり、地方支配権授与の問題やカリフによる神の権威の代理性の問題が明確に反映されていることが明らかとなった。

以上のような状況は、書記官僚が「文書作成術」の継承と独自の工夫を行うことにより、その時々の権威を在り方を行政に反映させ、また行政によって単なる経済的社会的利害だけでなく、ある種の世界観や倫理を反映させていったことを示しているが、ここで重要なのは、アッバース朝においてもマムルーク朝においても、このような書記官僚の中心をになったのは異教徒であるネストリウス派キリスト教徒やコプト教徒またサービア教徒とそこからの改宗者であったことである。このため、この研究は必然的に、初期および中世イスラーム世界における改宗者と同化さらに奴隷の輸入や彼らの持っていた文化のイスラーム化の問題と密接に関わることとなった。

（２）アッバース朝行政と文化における世界史的に重要な特徴は、そこで紙が用いられたことである。本研究は、この紙の伝播と行政使用の問題をも取り扱ったが、ここでもやはり、異教徒文化のイスラーム化と改宗、そして奴隷輸入と同化の問題が大きく関わっていることが明らかとなった。

アッバース朝における紙の使用は、①タラス河畔の戦いにおいて捕虜となった中国人がサマルカンドで製紙を行ったという伝承、②ハールーン・ラシードの時代にバルマク家が行政における紙の使用を開始したという伝承、の二つの伝承を軸に旧来論じられてきた。これに対して、①については近年これを見直し、タラス河畔の戦い以前からサマルカンドでの製紙が始まっていたとする説が有力となっている。しかし、本研究においてこれを再検討したところ、タラス河畔以前からの製紙術の存在は、可能性としては否定できないものの現時点では立証できないことが明らかとなった。

また②については、アッバース朝において9 世紀半ばから後半にかけて、紙による行政文書が急増し、10 世紀にはパピルスを駆逐することが判明したが、8 世紀末のラシードの時代に導入されたとする伝承は、その内容に大きな問題が存在し、マムルーク朝の状況を反映した伝承であることが明らかとなった。このため、旧来の定説は再検証する必要が生まれた。同時に、9 世紀半ばの紙の使用を裏付けるとされた有力史料の読解に問題点が存在することも明らかとなり、アッバース朝行政における紙の導入については、さらなる研究の進展が必要であることがはっきりした。

一方で、アッバース朝における紙は、１０世紀においてもサマルカンドで作成されたものが中心であり、中国、唐との接点であるサマルカンドを中心としたソグド地域がこの問題に与えた影響はきわめて大きい。９世紀半ばにはアッバース朝の政治と軍事に、ソグド地域からの改宗者や奴隷が大きく関わっていることはよく知られているが、行政や紙の導入にもこれらの改宗者の影響を見て取る必要を指摘することができる。

また中央アジア地域出身者におけるギリシア系諸学のアッバース朝における展開やペルシア系改宗官僚の文学と行政術への貢献、そしてキリスト教系行政官僚が同時にギリシア系科学をも伝承していたことなど、書記官僚社会と中央アジア系改宗者や奴隷そしてペルシア系改宗官僚の社会が、それぞれ相互に影響し合い、アッバース朝の文化と社会の枢軸部分を形成していたことが、推測されるようになった。この問題は、本研究を今後さらに展開する際の中心的な問題となり得ると思われる。

（３）上記の点を踏まえて、本研究のもう一つの成果として奴隷と改宗者の社会的な同化に関するものが上げられる。この問題は、当初は想定していなかった方向性であるが、前述のような改宗者の行政におけるプレゼンスと、それに大きく関わる奴隷の宮廷と軍事におけるプレゼンスが、書記官僚社会に与えた影響の大きさから、その重要性が明らかとなった。

特に、初期アッバース朝における被征服者や奴隷とアラブとの婚姻問題は、アッバース朝の社会変動そのものとも大きく結びついたものであり、ペルシア系書記官僚と強く対立したアラブ系文人においても、大きな主題もしくは政治問題として意識されていた。

アッバース朝という政治領域が、無数の非アラブ、非ムスリムを内包する中で、これらとの婚姻によって生まれた子供の血統をどのように理解するか、奴隷や改宗者の「人種」や社会的役割をいかにとらえるかは、大きな問題となったのである。特に書記官僚や宦官、奴隷軍人のようにアッバース朝の支配に直接関わる支配エリートでありながら、非アラブ、非ムスリム、奴隷出身者、または改宗者

である人々は、そのようなアイデンティティを保持しつつ、アッバース朝の支配に関わったのであり、彼らの血統や自己意識、また出自と従属性が８世紀から１０世紀にかけて、社会の中で大きく変化していく。この在り方を、本研究の過程の中で明らかにした。また、このような社会の中で奴隷とされた人々に対する「人種」概念が、地中海古代社会から継承されたものであり、当時の最先端の科学的思考として叙述されていた事実も、本研究の派生的な成果として明らかになったものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

①清水和裕、紙の伝播と使用をめぐる諸問題、『史淵』、九州大学大学院人文科学研究院、査読無、第149輯、2012年、79頁～97頁

②共同訳、アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（３）、谷口淳一編、『史窓』、京都女子大学史学会、第69号、2012年、1頁～35頁

③共同訳、アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（２）、谷口淳一編、『史窓』、京都女子大学史学会、第68号、2011年、51頁～94頁

④共同訳、アフマド・イブン・ファドル・アッラー・ウマリー著『高貴なる用語の解説』訳注（１）、谷口淳一編、『史窓』、京都女子大学史学会、第67号、2010年、27頁～65頁

⑤清水和裕、10世紀イラクのアブー・イスハーク・イブラーヒーム文書集にみるアフド文書様式、『史淵』、九州大学大学院人文科学研究院、査読無、第147輯、2010年、205頁～233頁

⑥清水和裕、中世イスラーム世界の黒人奴隷と白人奴隷：＜奴隷購入の書＞を通して、『史淵』、九州大学大学院人文科学研究院、査読無、第146輯、2009年、153頁～184頁

⑦清水和裕、ヤズデギルドの娘たち：シャフルバーヌー伝承の形成と初期イスラーム世界、『東洋史研究』、東洋史研究会、査読有、第67巻第2号、2008年、333頁～362頁

〔学会発表〕（計１件）

①SHIMIZU Kazuhiro, Ibn Hamdi and Hakamadare: A Comparative Study of the Two Famous Bandits in Iraq and Japan and their Historical Background in the Early Medieval Times, Iraqi-Japanese Symposium, Irbid, Iraq, 2010（ペーパー参加）

〔図書〕（計１件）

①吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市 2 権力とヘゲモニー』、東京大学出版会、2010年、（「バグダード －宗派街区騒乱と二重権力－」、239頁～251頁を執筆）

６．研究組織
(1)研究代表者
清水　和裕（SHIMIZU　KAZUHIRO）
九州大学・人文科学研究院・准教授
研究者番号：70274404

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：